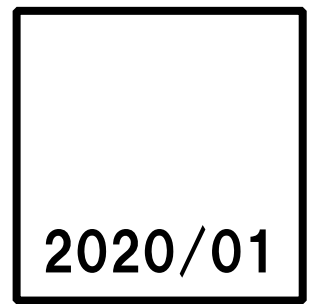




神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。



1964年に行われた東京オリンピックの聖火は、ギリシアのアテネで採火され空路を使いながら、アジア各国を巡って日本に届くという計画でした。

陸路の事前調査には日産が協力しました。踏査用車両2台を提供し、日産の社員1名も参加しました。『日産自動車三十年史』（1965年刊）には「1961年6月23日午前11時30分オリンピックを出発し、炎熱の砂漠横断をはじめとして、4070メートルの世界の屋根ヒンズークシ山脈を越え、大洪水のガンジス河を渡るなど、想像を絶する難コースを2台のキャリーカーで走破し、1961年12月28日、大

任を果たして無事帰国した。」（※原文の和暦は西暦に改めました。以下同）とあります。アテネから沖縄まで聖火を運んだのは日本航空です。

そして、「沖縄から鹿児島、宮崎、札幌へと聖火を運んだのが当社であった。」と全日空の『大空への挑戦・ANA50年の航跡』（2004年刊）に出ています。「当社は日本航空製造株式会社よりYS-11機をチャーターし、パイロットの訓練を行い、また、聖火を安全に輸送するための装置を考案するなど、日航製の職員とともに万全の体制を整えて臨んだ。ちなみにYS-11の「オリンピック」の愛称は、この

聖火輸送から名づけられたものである。」とあります。この聖火輸送の実績などがきっかけで、全日空ではYS-11の採用を決めたそうです。

聖火ランナーのユニフォームはミズノ（美津濃）が提供しました。ミズノは「日本選手の強化、記録向上のため、基礎体力の養成器具、トレーニングウェアなどを寄贈し、果てはコーチ会議にまで招かれて強化事業の推進に協力を求められるところまで打ち込んだ。企業の利益だとか販売促進だとか、そういった面だけからみれば、いかにも素人くさい。しかし、この大会に美津濃から参加した聖火リレー走者のユニフォームは、ギリシャから始まり日本全国を駆け抜けた。」と『スポーツは陸から海から大空へ』（1973年刊）に記されています。

1964「聖火」の話

（裏面に続く）

(表面から続く)

ランナーが持つ聖火筒(聖火トーチ)は、日本工機が製造しました。『日本工機五十五年史』(1988年刊)には、「聖火をギリシアのアテネから東京まで空路を含めて2万6000キロ、12カ国延べ10万人余のランナーの継走によって送り届けるのに必要な聖火筒はおよそ7300本に達したが、戸塚工場では生産の完遂に総力をあげ、オリンピック組織委員会に対し、1964年5月までに全量を納入した。」とあります。開会式で「最後のランナーが入場し、聖火台に点火した瞬間の興奮、それが無事に終了したときの安堵、いずれも昭和化成品の全社員にとっては、ひととき強烈に、かつ長く思い出に残るものであった。」(※昭和化成品は旧社名)とあります。

オリンピックの聖火台は、埼玉県川口市で作られた铸件です。製作者の一人・鈴木文吾氏に関する記事が川口铸件工業協同組合の『川口铸件の軌跡・そして未来へ』(1995年刊)に掲載されています。高さ2.1メートル、重さ2.6トンの聖火台は父・鈴木万之助と三人の息子(文吾氏ら)によって作り始められます。「親父の打ち込みようははたから見ても、すごいものでした。2カ月間というもの、飯も食わずに作業場にこもっていました。ところが出来あがった型に湯を注いだ途端、金枠から湯が流れ出してしまったんです。」「失敗した」とポツリとつぶやいた親父は、そのまま家に帰り、床についてしまいました。そして、それまでの緊張の糸が切れたかのように、8日後に息を引き

取ったのです。」と文吾氏は語っています。父親が倒れたその夜から、文吾氏と二人の兄は工場にこもり、不眠不休で聖火台を完成させたそうです。出来上がった聖火台には万之助の名前を刻みました。文吾氏は「あれは父が造ったものです」と言い、毎年、聖火台を磨きに行っていました。

聖火台に灯る火の燃料はプロパンガス(LPガス)で、三社で共納することになりました。開会式から五日間はマルキプロパンを販売する岩谷産業が納めることになりました。『岩谷産業八十年史』(2010年刊)には、「前夜祭ともいふべき皇居前広場の集火式では、東京都からの指名で篝火かがりびを象かたどつた聖火台も作成してガスも一手に供給し、開会式を含め、「聖火はイワタニ」を強烈に印象づける結果となった。」など、当時の様子が記されています。

このガスを運んだのはニチガス(日本瓦斯)でした。『ニチガス35年史 首都圏に生きる』(1990年刊)に「聖火のガスのバーナーは岩谷産業が無償で提供したが、中身のLPガスは、すべてニチガスが運んだ。聖火を一日燃やすのに要したLPガスは、約三トン、五百キロボンベで六本分である。」「半分残っているも、全部取り替えた。もしもガスを切らしたら、これは日本瓦斯だけだけでなく、日本の国名に傷がつく」という思いで運んでいたそうです。「クレーン車からの配送作業は危険でもあり、緊張と重責の連続だった。」とも書かれています。

(企画情報課 高田)

●お問合せ先 神奈川県立川崎図書館 企画情報課●

〒213-0012 川崎市高津区坂戸3-2-1 かながわサイエンスパーク 西棟2F

電話：044-299-7826 FAX：044-322-8878

<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>